14　「」─中世の説話集

21年度　神戸親和女子大学

★　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

　皇の女房、といふ歌よみありけるが、院の御衣、失せたりけるをア負ひて、籠り、きて、まもられけるに、三日といふにをうちこぼしたりければ、まもり、「１これに過ぎたる失やあるべき。出でたまへ」と申しけるを、小大進泣く泣く申すやう、「おほやけのなかのわたくしと申すは、これなり。いま三日のを①たべ。それにＡしるしなくは、われを具し出でたまへ。恨みあるまじ」と、みめ、かたち足らひ、づきたる女房の、うち泣きて申しければ、検非違使もあはれに思ひて、のべたりけるほどに、小大進、

　　思ひ出づやなき名たつ身は憂かりきとになりし昔を

とよみて、紅の薄様一重に書きて、御宝殿にりける夜、鳥羽法皇の御夢に②御覧ずるやう、よにけたかく、イやむごとなき翁の、束帯にて御枕に立ちて、やや」とおどろかし③参らせて、「我は北野の右近のの神にて侍る。めでたきことの侍る。御使たまはりて、見せ④候はむ」と申したまふ、とおぼしめして、Ｂうちおどろか⒜せたまひて、「天神の見え⒝させたまひつる。いかなる御事のあるぞ」と、「見て参れ」とて、鳥羽の御馬屋の御馬に、ものを乗せて、馳せよ」と仰せられければ、馳せて参りて見るに、小大進は雨しづくと泣きて候ひけり。

　御前に紅の薄様に書きたる歌を見て、これを取りて参るほどに、いまだ参りつかぬさきに、南殿の前に、かの失せたる御衣をかづきて、さきをば法師舞ひ、しりをば敷島とて、待賢門院なりけるが、かづきて、に舞ひて、参りたりけるこそ、天神のあらたに歌にＣめで⒞させたまひたりけると、めでたく⑤侍れ。

　すなはち、小大進をば召しけれども、かかるうを負ふことは、心わろきものにおぼしめさるるやうのあればこそ」とて、ウやがてなる所に籠り居にけり。「力をも入れずして、を動かし、目に見えぬをもあはれと思は⒟す」と、『古今集』の序に書かれたるは、２これらのたぐひなり。

（注）　１　鳥羽法皇―第七十四代天皇。一一〇三～五六。退位は一一二三年。

２　待賢門院―藤原璋子。一一〇一～四五。鳥羽天皇の中宮。

３　北野―北野天満宮。現在の京都市上京区。

４　祭文―神に捧げる言葉。

５　―神に供えた水。これを飲むと無実の罪を晴らしたり、願いなどがかなうとされた。

６　おしたりける―貼り付けた。

７　北面―院の御所を守護する武士。御所の北側に詰所があった。

８　鳥羽殿―白河、鳥羽両上皇が、現在の京都市伏見区下鳥羽付近に建てた離宮。壮大さで知られた。

９　―雑仕女。宮中などで雑役にあたった下級の女官。

10　もんかう―「問拷」で、疑いの意か。

11　仁和寺―京都市右京区にある真言宗御室派の総本山。代々法親王が住職を務めた。

問１　二重傍線部⒜～⒟の助動詞「す」「さす」のうち他と意味用法の異なるものを、次の①～④の中から一つ選べ。

　　①　⒜　　②　⒝　　③　⒞　　④　⒟

問２　傍線部ア～ウの解釈として最も適当なものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つずつ選べ。

ア　負ひて

　①　頭からかぶって　　　②　疑いを受けて

　③　言い争いに敗れて　　④　歌を詠んで解決せよと言われて

イ　やむごとなき

　①　とても高齢の　　②　正体不明の

　③　高貴な　　　　　④　みすぼらしい

ウ　やがて

　①　そのまま　　②　しばらくして

　③　遠く　　　　④　わざと

問３　波線部「おほやけのなかのわたくしと申すは、これなり」の解釈として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

①　公務員が仕事の中で個人的な恨みを晴らすというのはこのことです。

②　私は法皇にお仕えしていますが今は個人としてお籠もりをしているのです。

③　公務であっても少しは個人的な裁量を働かせることもあるということがあります。

④　公務執行中は自分を抑えなければならないということはわかっています。

問４　「思ひ出づや」の和歌は誰に向かって詠まれたものか。その対象として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

　　①　鳥羽法皇　　②　待賢門院　　③　検非違使　　④　天神

◎問５　本文の内容に合致しないものを、次の①～④の中から一つ選べ。

①　小大進は美人であった。

②　鳥羽法皇の夢枕に立ったのは天神であった。

③　天神は小大進の歌に感動した。

④　法師や敷島は小大進の無実を晴らしたかった。

問６　本文の最後に見える『古今集』は最初の和歌集として文学史上重要な作品であるが、その成立時期はいつ頃か。最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

　　①　八世紀　　②　十世紀　　③　十二世紀　　④　十四世紀

【確認問題】

１　傍線部Ａ～Ｃの語句の本文中の意味として適当なものを、それぞれ次から選べ。

Ａ　しるし

　ア　証拠　　イ　目印

　ウ　霊験　　エ　知識

Ｂ　うちおどろく

　ア　少し驚く　　イ　ふと目を覚ます

　ウ　ぐっと衰える　　エ　はっと気づく

Ｃ　めづ

　ア　感動する　　　イ　びっくりする

　ウ　腹を立てる　　エ　ときめく

２　「　」Ｘ～Ｚは誰の言葉か。それぞれ次から選べ。

ア　鳥羽法皇　　イ　待賢門院

ウ　小大進　　　エ　検非違使

オ　天神

Ｘ〔　　　〕　 Ｙ〔　　　〕　 Ｚ〔　　　〕

【補充問題】

３　□①～⑤の敬語の種類と、敬意の方向を、次のⅠ・Ⅱの語群からそれぞれ選べ。なお、同じ記号を何度選んでもよい。

Ⅰ　敬語の種類

　Ｓ　尊敬　　Ｋ　謙譲　　Ｔ　丁寧

Ⅱ　敬意の方向

　ア　小大進から検非違使へ

　イ　小大進から天神へ

　ウ　北面の武士から鳥羽法皇へ

　エ　天神から鳥羽法皇へ

　オ　鳥羽法皇から天神へ

　カ　作者から鳥羽法皇へ

　キ　作者から天神へ

　ク　作者から読者へ

　　　　Ⅰ　　　　Ⅱ

①＝〔　　　〕〔　　　〕

②＝〔　　　〕〔　　　〕

③＝〔　　　〕〔　　　〕

④＝〔　　　〕〔　　　〕

⑤＝〔　　　〕〔　　　〕

４　傍線部１・２の解釈として最も適当なものを、それぞれ次から選べ。

１　これに過ぎたる失やあるべき

　ア　これ以上の失敗があるのか。

　イ　これ以上の失敗はあるまい。

　ウ　ここを過ぎた失敗だろうか。

　エ　ここを過ぎた失敗に違いない。

２　これらのたぐひ

　ア　天神が夢の中で真実を見せたこと。

　イ　仏道修行をしたために願いが叶ったこと。

　ウ　歌に感動したので、天神が法皇の夢に現れたこと。

　エ　歌が天神の心を動かしたお陰で、助けてもらえたこと。

【解答】

問１　④

問２　ア＝②　イ＝③　ウ＝①

問３　③

問４　④

問５　④

問６　②

【確認問題】

１　Ａ＝ウ　Ｂ＝イ　Ｃ＝ア

２　Ｘ＝オ　Ｙ＝ア　Ｚ＝ウ

【補充問題】

３　①　Ⅰ＝Ｓ　Ⅱ＝ア　　②　Ⅰ＝Ｓ　Ⅱ＝カ　　③　Ⅰ＝Ｋ　Ⅱ＝カ

　　④　Ⅰ＝Ｔ　Ⅱ＝エ　　⑤　Ⅰ＝Ｔ　Ⅱ＝ク

４　１＝イ　２＝エ

【現代語訳】

　鳥羽法皇の女房で、小大進という歌人がいたが、待賢門院のお着物が一そろい、なくなってしまった（その疑いを）受けて、北野天満宮に籠もり、神に捧げる言葉を書いて、（籠もっている間）監視されていたが、（籠もって）三日目という日に、神水をこぼしてしまったので、監視の検非違使が、「（神水をこぼすなど）これ以上の失態があるだろうか、いやあるはずがない。（あきらめて籠もるのをやめて）外へ出なされ」と申したが、小大進が泣きながら申すことには、「公の（出来事であっても）中の（個人の裁量がきく）私事と申すのは、このことだ。あと三日の猶予をお与えください。それでも（天神様の）霊験が（現れ）なかったら、私を（外へ）連れ出しなさいませ。（それなら）恨むことなどあるはずがない」と、顔立ち、姿が申し分なく、魅力的な女房が、泣きながら申したので、検非違使も気の毒に思って、（参籠期間を）延ばしたときに、小大進が、

　天神様、思い出しなさいますか。罪がないのに汚名を着せられた身がつらかったと、現人神としてられるようになった昔のことを。

と詠んで、紅の薄様の一重（の紙）に書いて、御宝殿に貼りつけた夜、鳥羽法皇が夢でご覧になったことは、とても気高く、高貴な老人が、（正装の）束帯姿で枕元に立って、「これこれ」と（法皇の）目を覚まさせ申し上げて、「我は北野の右近の馬場の神でございます。素晴らしいことがございます。お使いを（遣わして）いただいて、お見せしましょう」と申し上げなさる、と（法皇は）ご覧になって、ふと目をお覚ましになって、「天神が（夢に）現れなさった。どんな御事があるのだろうか」と（思って）、「見て参れ」と（命令なさっ）て、「鳥羽の馬屋の馬に、北面の武士を乗せて、走らせよ」とおっしゃったので、（北面の武士が）馬を走らせて参上して見てみると、小大進が雨しずくと涙を流してお控えしていたのだった。

　（祀られている天神の）御前に紅の薄様（の紙）に書いた歌（があるの）を見て、（北面の武士は）これを取って帰参したとき、まだ帰り着かないうちに、鳥羽離宮の南殿の前に、あの紛失していたお着物をかぶって、前を法師が舞い、後には敷島といって、待賢門院の雑役係であった女が、かぶって、獅子舞を舞って、参上したのは、天神があらたかにも（小大進の）歌に感動なさった（から起きたことだ）と、すばらしくありがたいことです。

　すぐに、（法皇は再び出仕するよう）小大進をお呼びになったけれども、「こういう疑いを受けるのは、（法皇が私を）心根のよくない者とお思いになるお気持ちがあるから（です）」と言って、（小大進は）そのまま仁和寺のある所に閉じ籠もってしまった。「（和歌は）力も入れずに、天地を動かし、目に見えない鬼神の心をも動かす」と、『古今集』の（仮名）序に書かれているのは、こういう種類のことなのである。